

第二言語としての日本語学習における省察支援活動の設計 —ID と LT の視点による妥当性の理論的検討—

Designing Reflection-Support Activities for L2 Learners of Japanese - Theoretical Validation from Instructional Design and Learning Technology Perspectives -

甲斐 晶子*

Akiko KAI*

*青山学院大学

*Aoyama Gakuin University

Email: a-kai@aim.aoyama.ac.jp

あらまし：筆者は、第二言語として日本語を学ぶ大学生を対象に、日々の言語使用経験を省察し、次の学習目標を自ら見出すことを目的とした、4段階の省察活動モデルを提案している。本稿では、提案モデルについてインストラクショナルデザインの観点から設計の妥当性を評価し、その支援ツールとして開発したチャットボットシステムについて、ラーニングテクノロジーの観点から技術選定評価を行った。その結果、本モデルおよびシステムは、学びの省察を深化させるために十分な要件を備えていると結論づけた。

キーワード：省察、自己主導型学習、第二言語としての日本語、ID 第一原理、SECTIONS モデル

1. はじめに

学習者中心の教育への転換に伴い、自己主導型学習 (Self-directed Learning, SDL) を進める力により重きが置かれる昨今では、自己の学びを振り返り、次なる成長へとつなげるための「省察 (Reflection)」の力もまた重要となる。他方、教育現場においては、省察の目的や具体的手順が十分認識されず義務的に取り組む学習者や、履修者の多さから表面的な確認作業に留まらざるを得ない教員が見受けられる。省察に関する体系的なガイドやモデルは多く提供されているものの、文脈に根ざした深い意味づけや行動変容に十分につながっていない学習者への支援体制をいかに構築するかは課題である。筆者は、第二言語としての日本語 (Japanese as a Second Language, JSL) を学ぶ大学生を対象とした日本語 SDL 科目の担当経験から、授業「外」での日本語使用に深い省察を促すための教育デザイン研究を進めている。本稿では、その評価段階として、提案する省察活動モデルとその支援チャットボットについて、インストラクショナルデザイン (ID) およびラーニングテクノロジー (LT) の観点から理論的妥当性を評価する。

2. JSL 学習者のための省察活動モデル

筆者は、JSL を主な対象とし週次で開講する日本語科目の履修者を、自己主導型言語学習の実践コミュニティと捉え、教室という共有された価値と関係性を持つ拠点を基盤に、教室外での言語使用という実践経験を共有し、省察を繰り返すことで、自己と集団の成長を目指す省察活動モデル⁽¹⁾を提案する。

本モデルは4つの活動で構成される循環モデルであり、理論的基盤として5Rs モデル⁽²⁾を採用している。5Rs モデルは「Reporting, Responding, Relating, Reasoning, Reconstructing」の5段階からなる省察プロセスであり、この段階に従い、日常の言語使用経

験について省察していくことで、次なる言語学習目標を明確化する。活動1は学習者が直面した言語使用経験について、事実とその経験に対する感情的・直感的な反応を報告する日次活動である (Reporting & Responding)。活動2はそれらの記録から一つの経験を選び、省察を記述することで言語化する授業前の個人活動である。構造化された質問により、経験を既有知識や過去の経験と関連付け (Relating)、深い原因分析や意味の解明を試みる (Reasoning)。活動3はクラスメートや教員との授業活動である。対話を通じて省察をさらに深化させる。自らの経験を語り、他者の経験を聞くことで追体験する。また、感情を共有し、より望ましい行動について話し合い、日本語で表現する練習をする。対話後に活動4として、活動2の省察記録に加筆修正する形で意識の変容や再構成された省察を記述し (Reconstructing)、翌週までのアクションプランを追記した上で、教員へ提出し、その達成に向けて行動する。

3. ID の視点からの理論的評価

メリルの ID 第一原理 (First Principles of Instruction, FPI) では、効果的な学習活動には共通する5つの原理「Problem-Centered, Activation, Demonstration, Application, Integration」が存在すると仮定される⁽³⁾。本節では、FPIに基づき、提案モデルの理論的妥当性を検討する。本モデルは学習者が日常において経験した言語使用経験から省察プロセスが始まる。これは「Problem-Centered」であると言え、また、その真正性が学習の転移を最適化し「Application」や「Integration」を促す。活動2では学習者に経験に対する自身の認識や反応を思い起こさせる。個人活動では既有経験との接続が促され、自己分析や関連づけを促す。これらは「Activation」の原理に対応する。さらに、活動3において経験やその解釈を共有する

ことで、身近なロールモデルを提示し、他者の省察から学ぶ機会を提供する。これは「Demonstration」の原理に対応する。活動4は、これらの活動を通じて得られた教訓や新しい理解を、具体的な行動計画に落とし込み、学習者自身の実生活や今後の学習に統合する目的がある。これは次なる「Application」や「Integration」の機会創出につながる。

このように、提案モデルは文脈に根ざした具体的経験を重視し、学びの場を実生活と教室の往還とする構造を特徴とする。支援された個人活動記録と、教室という実践コミュニティでの共有を通じて、経験から教訓や学びを抽出し、知識の再構築を促すものであり、FPIの原理と高い整合性を持つことから、教育効果が期待できる設計であると評価できる。

4. LTの視点からの技術選定評価

活動1での日常的な経験の記録を支援するために、段階的問いかけ機能を持つ省察支援チャットボット（以降、本システム）を開発した⁽⁴⁾。本節では、教育工学および遠隔教育の分野で特に実践現場での導入・運用可能性を重視する枠組みとして認知されるSECTIONSモデル⁽⁵⁾を用いて、提案システムの適合性を検証した。SECTIONSモデルは、学習者中心の教育における技術選定において考慮すべき8つの観点（Students, Ease of use, Cost, Teaching and other pedagogical factors, Interaction, Organisational issues, Networking, Security and privacy）と39項目の適合性チェック例が提示されている。中でも「Students」の多様性を理解し、その学習ニーズや技術へのアクセスを踏まえた技術選定の重要性が強調されている。

筆者およびLTの専門家により適合性を評価した結果、本システムは複数の観点において高い適合性を示した。「Students」に関して、対象となるJSL学習者は、日本語能力やデジタルリテラシーにおいて多様性を有する。本システムは、短いテキストでの応答を促す設計を採用しており、中間言語段階にある学習者でも言語的負荷を感じにくく、省察を日常的に行うための実用的な足場として機能する。また、記録媒体をスマートフォンで動作するチャットボットとしたことで、教室外での言語使用経験を、時間・場所を選ばず記録できる柔軟性が実現した。「Ease of use」に関して、操作インターフェースは、広く普及するSNSを利用しており、直感的な利用が可能である。管理者側である教員にとっても、質問項目はブラウザベースで編集でき、操作に特別な技術スキルを要しない。「Cost」に関して、運用コストを抑えることで、継続的な活用が促進できる。低次段階の省察記録を半自動化することで教員の時間的コストの削減に貢献している。金銭的コストについては本稿執筆時点では科研費助成により無償提供が可能であるが、持続性の点で課題は残る。「Teaching and other pedagogical factors」に関して、省察の構成要素に対応した段階的問いかけにより、段階に合わせた足場掛けの支援が可能である。また、本システムは生

成AIによる個別対話機能を搭載している。対話の目的や考慮事項を調整するプロンプトは各教員が編集でき、自身の教育観や信念を反映させることができる。「Interaction」、「Organisational issues」、「Networking」について、本システムは学習者同士の直接的な相互作用機能は備えていないが、LTIにより学内LMSとの連携が可能である。記録内容を次段階の省察活動や教室での活動へ接続し、対話や共有の出発点として機能する。「Security and privacy」に関して、省察内容には個人的体験が含まれるため、記録媒体は情報保護ポリシーを明示した上で紙も含めた複数の候補から学習者が選択できるようにすることを教員への利用条件とすべきであろう。

以上から、本システムは、モバイル端末による直感的な利用、段階的問いかけによる省察の深化支援、低コストかつ教員の負担を抑えた持続可能な運用設計という点において、有効性が認められる。全体として、本システムはJSL学習者の省察を支援し、深化させるための教育実践基盤として十分な適応性と拡張性を備えていると評価できる。

5. まとめ

本稿では、JSL学習者の省察深化を支援する活動モデルとチャットボットをIDおよびLT観点から評価した。FPIおよびSECTIONSモデルとの整合性の検討を通じて、その理論的妥当性が確認された。本研究は、実践課題への介入と理論的理解の発展を両立する教育デザイン研究の立場から、省察支援における新たな学習環境デザインと技術的支援の可能性を示す試みであり、今後の学習支援環境の高度化に向けた一つの基盤となることを目指す。

謝辞

本研究はJSPS科研費21K13646, 25K06527による助成を受けた。

参考文献

- (1) 甲斐晶子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明: "大学初年次日本語科目における自律学習支援のケーススタディー: チャットボット利用による授業外リフレクションと授業内活動の統合", 教育システム情報学会研究報告, Vol. 38, No. 5, 教育システム情報学会, pp. 1-8 (2024)
- (2) Bain, J., Ballantyne, R., Mills, C., and Lester, N.: "Reflecting on practice: Student teachers' perspectives", Flaxton, Qld (2002)
- (3) Merrill, M. D.: "First principles of instruction", Educational Technology Research and Development, Vol. 50, No. 3, pp. 43-59 (2002)
- (4) 甲斐晶子, 和田卓人: "学習者個々のニーズに応じた指導や支援を提供する生成AI組み込み型チャットボットシステムの開発と評価", 教育システム情報学会研究報告, Vol. 39, No. 7, pp. 9-16 (2025)
- (5) Bates, A. W.: "Teaching in a Digital Age - Second Edition", <https://pressbooks.bccampus.ca/teachinginadigitalagev2/> (参照 2025.5.20)